

主 題：争うのを止めなさい2

聖書箇所：ローマ人への手紙 14章5-12節

パウロはローマの教会に集うクリスチャンたちに対して、争うのを止めて一つになりなさいと命じました。この「一致する」という命令はローマの教会だけに与えられたものではなく、パウロは様々な教会に同じメッセージを送ります。たとえば、コリントの教会にエペソの教会にピリピの教会に、同じようなメッセージを送っています。Iコリント1：10には「さて、兄弟たち。私は、私たちの主イエス・キリストの御名によって、あなたがたにお願いします。どうか、みな一致して、仲間割れすることなく、同じ心、同じ判断を完全に保ってください。」と記されています。また、ユダヤ人と異邦人のクリスチャンが互いに愛し合うことで一つになるようにと、エペソの教会にも同じメッセージを送ります。エペソ4：13「ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。」。そして、ピリピの教会に対してもパウロはこのようにメッセージを送ります。ピリピ2：2「私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。」、ピリピの教会といえば、パウロがローマで捕らわれていたときに、エパフロデトを派遣した教会でした。パウロの働きのために献金を送った教会でした。パウロがテサロニケで働きをしたときもそうでした。コリントに滞在して働きをしたときも、この教会はそのようにパウロの働きを支えました。パウロは彼らに感謝を述べています。そのピリピ人への手紙の中で、「あなたがたは一致を保つように」と命じるのです。同じ、ピリピ4：2にも「ユウオデヤに勧め、ストケに勧めます。あなたがたは、主にあって一致してください。」とあります。世的なコリント教会ならまだしも、教理をしっかりと教え込まれていたすばらしいエペソやピリピの教会にまで、このメッセージを与えなければならないというのは非常な驚きです。そして、ローマの教会に対しても、ローマ15：7でこのように言っています。「こういうわけですから、キリストが神の栄光のために、私たちを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れなさい。」と。

こうしてパウロの「一致しなさい」というメッセージを繰り返して見てゆくと、次のことが言えます。それは「一致することは非常に難しい」ということです。人が集まればそこには様々な問題が生じます。クリスチャンであっても集まればそこに問題が生じます。もし、教会が「私はあの人は好きでこの人は嫌いだ。この人はいいけれどあの人はいやだ。」という、そのような人が集まっているなら、悲しいことに、私たちは悪魔が喜ばれることを選択しています。そのようなことは決してあってはならないのです。そのためにパウロはこの大切な教え、その群れが、クリスチャンたちが一つになって行くためにどうすればいいのかを教えています。

◎すべての不一致に対して一致を命じているのではない

(1) 罪が原因の場合、一致を命じてはいない

それを見る前に、私たちが忘れてはならないことを確認します。パウロは「一致しなさい」というメッセージを与えています。でも、彼らの間にあった争い、問題は「罪が原因でなかったから」パウロは「一致しなさい」と命じたということです。パウロは教会にどのような罪があろうと、どのような間違った教えが入っていても、みなキリストという名のもとに一致しなさいと教えているのではありません。確かに、キリスト教会はそのような方向に向かいます。キリストという名のもとにみないっしょになりましょうと。しかし、みことばを見たときに、神のみこころはそうではないことは明らかです。

パウロは同じローマ16：17でこのように言います。「兄弟たち。私はあなたがたに願います。あなたがたの学んだ教えにそむいて、分裂とつまづきを引き起こす人たちを警戒してください。彼らから遠ざかりなさい。」と。また、テトス3：10にも「分派を起こす者は、一、二度戒めてから、除名しなさい。」とあります。ですから、メッセージはクリアです。パウロが言うことは、もし、教会の中に罪が原因で分裂があるなら、教会は罪を犯している人たちを何度か戒めて、それでも悔い改めないなら、彼らを除名しなさいということです。「何と愛のないこと！」と言うかもしれません。しかし、みことばは確かに、罪が原因の問題であるならその罪を正すことが必要であり、それでも悔い改めがないときは彼らと別れなさいといえます。それでも一つになるようにとはみことばは決して教えていません。

ローマ書14章を見たときに、パウロはこの教会に存在した争いは罪が原因ではなかったゆえに、一つになりなさいと勧めているのです。そのことを私たちは忘れてはいけません。

(2) 個人的な見解(考えや好み)が原因の場合、一致を命じている

この教会にあった問題は、個人的な見解、彼らの好みや考えが原因だったのです。ですから、パウロ

はこのローマの教会の兄弟姉妹たちに対して「さばいてはいけない」と言うのです。この14章を学んで行くとき私たちは、「信仰の弱い人たち」、「信仰の強い人たち」ということばを見て来ました。

・「信仰の弱い人たち」

彼らもクリスチャンです。イエス・キリストを信じる者たちです。彼らの多くはユダヤ人だったのですが、これまで、神がお喜びになると信じて厳粛に守り行なって来た、食べ物に関する教え、飲物に関する教え、そして、特別な日に関する教え、その習慣を捨てきれずにいたのです。なぜなら、それが神のみこころだと教えられて来たからです。先祖代々ずっとそのようにして来たのに、今、それをしなくてもいいと言われることに抵抗を感じるというのは、私たちにも理解できることです。また、同じように、異邦人のクリスチャンの中に救われる前に良しとしていたことが、救われた後、してはならないという、先の逆もありました。戸惑いを感じた人たち、特に、後で見ますが、偶像にささげた肉に関して食べていいのかどうなのか？そのことに関しても彼らが戸惑っていた様子をパウロは私たちに教えています。ですから、信仰の弱い人たちは、信仰が未熟だという意味よりも、このようなことにまだ捉われていたと言えるのです。面白いことは、パウロは決して彼らの信仰の弱さを批判していません。彼らは救われて主を愛していたのです。けれども、主が喜ばれることと信じて実践して来たことからすべて抜け切れなかったのです。

・「信仰の強い人たち」

彼らはみことばを学んでキリストにあつて私たちは自由にされたと、そのことを喜んでる人たちです。彼らは確かに信仰において成長していたでしょう。

このような人たち、このようなグループが教会の中に存在していたのです。私たちがそれとともに覚えなければいけないことは、どちらのグループも主なる神に喜ばれることを考えて行動していたということです。主が喜んでくださればそれでいいと、そのことを願って行動していたということです。彼らが争っていたのは罪が原因ではなかったのです。それぞれの考え、それぞれの見解が原因だったゆえにパウロは言うのです。「互いを受け入れなさい」と。

前回から私たちは、主なる神が喜ばれる一致を持つ群れとなってゆくために、また、主の栄光をこの世に輝かせ続ける教会へと成長するために、一致しなさいと教えるパウロは、四つの大切な理由を教えてください。私たちが一つとなって行くための大切な理由です。

☆私たちが一致することの重要性

1. 主が受け入れてくださった 1-3節

最初に見たのは(3/25)、主が私たちを受け入れてくださったのだから、あなたたちも互いに受け入れ合って行きなさいということです。あなたたちはみな仲間なのだからとパウロは教えました。ですから、弱い人を侮ったり軽蔑したりするのではなく、受け入れるように、仲間なのだからと言うのです。また、信仰の強い人たちにさばきを行っていた弱い人たちに対して、仲間なのだから、彼らをさばいてはいけないと、パウロは1-3節で教えました。

2. 主が救ってくださった 4節

4節に「あなたはいついだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。」とあります。パウロがこのように言ったのは、信仰の弱い人たち、すなわち、様々なかつての教えに捉われていた人たち、彼らは信仰の強い人と言われる人たちが、その教えを全く無視して自由に歩んでいる姿を見て、このような歩みをしている人たちは神に喜ばれていない、このような人たちは神の役に立たないと、そのようにさばきを下していたのです。私たちはこうして旧約の食べ物、飲物に関する教え、特別な日に関する教えを今も大切だ思っているのに、彼らはそれらを一切無視している、だから、神に喜ばれていないと、弱い人たちはそのように思っていたのです。そこでパウロは彼らの過ちを指摘するのです。パウロは「あなたはいついだれなので、他人のしもべをさばくのですか。」と言っています。すなわち、あなたは自分をいついだれだと思っているのですか？と、このように厳しいことばをもって彼らを責めているのです。

なぜ、パウロは彼らを責めたのでしょうか？それは次の理由です。強い人をさばくことによって、弱い人たちは自分を唯一のさばき主である主の地位に置いていたからです。主なる神の地位に自らを置いていたからです。ですから、パウロは非常に厳しく彼らを責めるのです。そこでパウロは、「強い人たち」の救いについて語ります。

・「主」について

4節に出て来る「主人」や「主」は主イエス・キリストのことを指しているのです。パウロが言うことは、もし、あなたがさばくなら、さばく権利をもっておられる唯一のお方、主イエス・キリストの地位に自らを置いてることになり、それは大変な間違いだということです。だから、さばくことは止め

なさいと言ったのです。

1) 主は救い主

4節でパウロが教えることは、私たちの主が私たちの救い主であり、私たちの主が私たちを守ってくださるお方だということです。パウロは救いについて話すのです。

(1) 「立つのも、倒れるのも」とは？

・「神の救い」のこと

4節に「しもべが立つのも倒れるのも、」とあります。パウロは「救い」のことを言っているのです。神が与えてくれる救いのことです。そのことをパウロは神のさばきを通して教えようとするのです。つまり、神のさばきが下るときに、ある人は「立ち」、ある人は「倒れる」と言うのです。立つことができるのは、その人は神によって受け入れられているからです。つまり、救われているからです。倒れる人は、受け入れられていないゆえに彼らはさばかれるのです。

・「立つ」：新約聖書にこのことばは10回出て来ます。どれを見てもこれは「救い」のことです。テサロニケの教会に大変な苦難が訪れたそのときにパウロが彼らに関して願ったことは、彼らの信仰がしっかりしていることでした。このように言います。Iテサロニケ3：8「あなたがたが主にあって堅く立っていてくれるなら、私たちは今、生きがいがあります。」と。彼らの信仰がしっかりしたもの、真実なものであるようにとパウロは望んでいたのです。ですから、このように「立つ」とは救いに関することです。

・「倒れる」：このことばは新約聖書に90回出て来ます。ローマ11：22で私たちはこのことばをすでに見て来ました。「見てごらんなさい。神のいつくしみときびしさを。倒れた者の上にあるのは、きびしさです。」と神のさばきのことです。倒れた者に対する神の厳正なさばき、厳しい神の仕打ち、それが記されています。もっと良い例は、マタイの福音書7章に記されていることです。イエスが砂の上に家を建てた人と岩の上に家を建てた人のことを話されました。決定的な違いがありました。岩の上に建てた人は「わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なう者はみな、」（7：24）とあります。つまり、これは救われている人のことです。岩の上に家を建てている、しっかりした土台の上に家を建てている、つまり、真の神であるイエス・キリストの上に信仰を立てている人、信じている人、その人は「雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。」（7：25）と言われています。救われているからです。

ところが、砂の上に家を建てた人は、「また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なわない者はみな、」（7：26）とあり、7：27には「雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。」と記されています。つまり、砂の上に家を建てた人は、神のことばを聞いていたかもしれないけれど、真の神を心から受け入れることがなかった、救いに与ることがなかった人たちです。その人たちはさばき came ときには倒れてしまうのです。

ですから、このように「立つ」「倒れる」というのは「救い」のことです。

(2) 「主の心次第です」とは？

「しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。」とあります。つまり、パウロはここで今一度、救いとは神のみわざであることを明らかにしたのです。ここにおられるイエス・キリストを信じておられる皆さん、救いに与っておられる皆さん、あなたが何かをしたから神はあなたを救ってくれたのではありませんね。神があなたのうちに働き、あなたを一方的にこの救いへと招いてくださったのです。救いは神の恵みです。パウロはそのことを言うのです。

(3) 「このしもべは立つのです。」

「あなたたちは自由に食べて飲んでいて、特別な日を守っていない、神の役に立たない、神にさばかれる」と言っている人たちに、パウロは「彼らは神によって救われている」と言います。

2) 主は守り主

その後、「なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。」と続いています。つまり、神は私たちのような罪人をその罪から救い出すことができるだけでなく、私たちをその御手をもってしっかりと守り続けることができるお方だと言っているのです。ユダ24節には「あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に、」とあります。神はあなたを守ってくれるということです。皆さんもよく覚えておられる聖書の箇所の一つ、主イエス・キリストが言われたことですが、ヨハネ10：28に「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」とあります。あなたを罪から救ってくださった神は、あなたを守り続けてくださるのです。だから、私たちは一度救われることによって永遠に救われたと確信をもって生きることができるのです。

そのことは私たちはすでにローマ書8章で学びました。パウロは教えています。8：33-35「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。：34 罪に定めようとするのはだれですか。

死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしてくださるのです。:35 私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。」、37-39節「しかし、私たちは、私たちが愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。:38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、:39 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」、救われた私たちはその方の御手の中にしっかりと抱かれ守られていると言います。Iコリント1:8にも「主も、あなたがたを、私たちの主イエス・キリストの日に責められるところのない者として、最後まで強く保ってください。」とある通りです。このことをパウロはローマ14章で、彼らをさばいていた者たちに再び教えるのです。神が救ってくださった、確かに、考え方や見解は違ったとしても、救われているゆえにさばき合うのは止めなさい、主が受け入れてくださったのだからと、そのように教えます。

一つになって行きなさい。神があなたがたを受け入れてくださったのだから、神があなたたちを救ってくれたのだから一つになって行きなさいと言うのです。

3. 主に従う者 5-9節

あなたがたは主に従う者だから一つになって行きなさいと教えます。

1) 異なった考えの存在 5-6節

5-6節を見ると、パウロは確かにこの教会には異なった考えがあったことを認めています。「ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人もいますが、どの日も同じだと考える人もいます。それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。:6 日を守る人は、主のために守っています。食べる人は、主のために食べています。なぜなら、神に感謝しているからです。食べない人も、主のために食べないのであって、神に感謝しているのです。」、二つのことに気付きます。

・ 日に関して ⇒ 5-6 a節

・ 食べ物に関して ⇒ 6 b節

このように二つの異なった考え方があったことが記されています。

2) 各自の責任 : 主に対して自分の心が正しいと確信することを行なうこと

その上でパウロは、それぞれの信仰者に与えられている責任について話をします。ローマ教会のクリスチャンだけでなく私たちにもいろいろな考え方があるけれど、これがあなたの責任だということをパウロはここで教えるのです。

(1) 確信をもつこと 5節

「それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。」とあります。パウロが言いたいことは、あなたに与えられている神からの責任とは、神の前に何が正しいのか、何が神に喜ばれるのか、栄光を現わすことは何なのか、それをしっかり考えて、その確信に基づいて選択をしていきなさいということです。なぜなら、信仰者である皆さんも、このローマのクリスチャンと同じように、自らの確信に基づいて行動しているはずですから、それと違うことをやろうとしたときに、あなたの良心があなたに「果たしていいのかどうか?」と問いかけます。だから、私たち信仰者に与えられている責任とは、神の前に何が正しいのか、神が喜ばれることは何なのか? 神の栄光はどうすれば現われるのか? その考え、その確信に基づいてあなたが歩んで行くようにと、パウロは5節で教えているのです。

(2) 確認すること

そのために私たちは確認しなければいけないことがあります。私たちの確信していることが本当に神の前に正しいかどうかです。パウロはここに二つのことを言っています。

a) 正しい動機 : 感謝 6節

6節には「日を守る人は、主のために守っています。食べる人は、主のために食べています。なぜなら、神に感謝しているからです。食べない人も、主のために食べないのであって、神に感謝しているのです。」とあります。「感謝している」ということばがどちらのグループにも使われています。つまり、大切なことは、私たちが感謝をもってそのことをしているかどうかです。常に心を探ることが大切です。もちろん、これは食べ物、飲物、特別な日だけのことではありません。私たちの為しているすべてのことが、本当に神への感謝に基づいて為しているかどうかです。たとえば、私たちはこうして礼拝に集まって来ますが、本来なら、その正しい動機は神への感謝です。神によって救われたことを感謝している者は、兄弟姉妹とともに神に感謝を現わしたいと、そのような思いをもって集まって来ます。ところが、ある人は最初はそうだったかもしれないが、時間とともにだんだん「行かなければいけないから」とか「〇〇さんに誘われたから」、「行かないと何か言われるから」というような動機になっているなら、今、私たちが見ていることと違います。私たちににとって大切なことは、自分の心を吟味して、私たちが選択している

ことは本当に神への感謝から出ていることかどうかを吟味することです。

この二つグループ、私たちは食べないと決め人たちは、そのことに神の前に正しいという確信をもっているし、彼らは喜び感謝していました。なぜなら、それによって神が喜んでくださるという確信をもっていたからです。その逆のグループも同じです。彼らも神のためにしていました。神が喜んでくださるならいいと決心して、そのような確信に基づいて選択をしていたのです。ですから、私たちは自らの確信に基づいてするのです。あなたの心が真に神に感謝してその上で決めたのなら、喜んでやりなさいと言うのです。

b) 正しい目的 : だれのために生きるのか 7-9 節

また、私たちは正しい目的をもって為しているかどうかを確認することが必要です。つまり、だれのために生きているのかということについていつも自らに問い掛けながら生きていくことです。7-8 節にはこのように記されています。「:7 私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。:8 もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。:9 キリストは、死んだ人にとっても、生きている人にとっても、その主となるために、死んで、また生きられたのです。」。私たちは一つの目的をもって生きる者です。私たちは一人の主人をもってその方に従う者です。

・一つの目的 : このことのために生きている 7-8 節

私たちは一つの目的をもって生きています。それは「私たちの主のために生きる」ということです。この7 節から8 節を見るとパウロは、「自分のために生きること」と「主のために生きること」、また、「自分のために死ぬこと」と「主のために死ぬこと」と対比しています。ある人たちは自分のために生き自分のために死んでいきます。ある人たちは主のために生き主のために死んでいくのです。そのどちらからかと言うのです。

⇒ **自分のために生き、自分のために死ぬ者 = 救われていない人**

⇒ **主のために生き、主のために死ぬ者 = 救われている人**

救われていない人間は、生まれながらに自分のために生き、自分のやりたいことを終えて死んでいくのです。しかし、「主のために生き主のために死ぬ」とは生まれ変わった人のことです。救われた人のことです。この人は日々の生活において主のすばらしさが明らかにされ続けることを願いながら生きている人です。先ほどから見ている通りです。主に喜ばれることを考えてそれを選択していこうと、そのように歩んでいる人です。そして、「主のために死ぬ者」とは、自分の死を通して神のすばらしさが証されて欲しい、私の死を通して私の主のすばらしさが証されて欲しい、それが明らかになって欲しいと、そのように願って生きている人です。主のために死ぬ者とは、今日という与えられた日を主のために生きている人です。なぜなら、主のために今日を正しく生きている人は主のために死ぬ備えができて人だからです。

私たちがたまに聞くことは「もう疲れた、もう苦しいから早く死にたい」ということばです。ここで言われている「主のために生き主のために死ぬ」人、そのように願って生きている人は、そのような考えが心に入り込むことを赦さない人です。なぜなら、そんな考えを持っている人はその日を喜んでいません。与えられたその日を感謝していません。主のために生きる人は与えられたその日を感謝して、どうすればこの主をもっと喜ばせていくことができるのかを考えて生きている人です。そのような信仰者になりたいものです。入院していようと、元気でいようと、年老いて体の自由が利かなくなっても、その人の心の中にはこういう喜びがあるのです。「主が今日を私に与えてくださった。主よ、どうぞ私の語ることも、私の為すことも、私の考えることもすべてがあなたに喜ばれますように。そして、この日をくださったあなたに喜んでいただける日を私は過ごしていきたい。」と。だから、その人は神の前によく祈ります。神の助けが必要であることを知っているからです。「主よ、どうぞ私の心を支配し続けてください。あなたを悲しませるような悪い考えが私の心に入って来ないように私の心を守ってください。あなたの力によってあなたのすばらしさを証するその機会を与えてください。これまでのように外に出て行くことができなくとも、家にあつて何かできることをさせてください。」と。そのような人は喜びをもって感謝をもってその日を歩んでいます。

皆さん、神を喜ばせようと思って生きている人は、確実に喜びをもって生きている人です。喜びをもって一日一日を過ごしている人です。なぜなら、我々が神を喜ばせようとして正しい選択をする時に、神が喜んでくださるからです。その神がその喜びをあなたに返してくださるからです。私たちが望むべきことは神を喜ばせることです。私たちがして来たことは神でなく自分を喜ばせることでした。それは自分も喜ばないし神も喜ばないのです。でも、私たちが自分ではなく神を喜ばせることを選択するとき神が喜んでくださるなら、私たちもその喜びをもって生きるのです。だから、いつも喜ぶことができるのです。

私たちが覚えなければいけないことは、我々は主のために生きている、主を喜ばせるために生きているということです。その目的をしっかりと覚えて歩み続けることです。

・一人の主 : このお方のために生きている

そして、私たちは一人の主人に従う者へと生まれ変わったのです。主イエス・キリストのためだけに生きているのです。なぜなら、

◎主のために生きる理由

1) 主のいのちという尊い代価によって買い取られた者だから

私たちを罪から救い出すために、主なる神はご自分の尊いいのちを捨てて、私たちをその罪から、永遠の滅びから救い出してくださった、だから、私たちはその方のために生きるのです。I コリント 6 : 20に「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わさない。」とあります。私たちは神の尊い犠牲によって買い取られた者です。

2) 私たちは生き方が変えられた者だから

かつての誤った生き方から、本来の正しい生き方へと私たちは生まれ変わっているのです。II コリント 5 : 15には「また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」と記されています。神が何を望んでおられるのかが明確です。神が望んでおられるように生きることです。この方のために生きていくことです。この方を喜ばせるために生きていくことです。そのような信仰者が増やされていくことです。私たちが生まれ変わったのです。この方に従う者として生まれ変わったのです。だから、我々はこの方に従っていきましょうとします。

3) 私たちは主の奴隷だから

私たちが奴隷だから主人に従うのです。ローマ 6 : 22には「しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。」とあり、かつては罪の奴隷、サタンの奴隷だったのです。それが救われて神の奴隷、義の奴隷となったのです。だから、私たちがこの主人を喜ばせるために生きているのです。

私たち信仰者に与えられた一つの目的は「神を喜ばせたい」です。なぜ、この方にそのようにして従って行くのでしょうか？私たちは神によって買い取られた者だから、神の所有物だからです。私たちが神によって新しく生まれ変わったのです。本来のあるべき姿をもって、あるべきその目的をもって生きる者へと生まれ変わったのです。そして、私たちが感謝なことに、主の奴隷とされたのです。あなたも私も信仰者である私たちは、主なる神の奴隷なのです。だから、この方に従っていきましょうとするのです。

もう一度ローマ書のみことばに戻ってください。9節に「キリストは、死んだ人にとっても、生きている人にとっても、その主となるために、死んで、また生きられたのです。」と書かれています。パウロはここで主イエス・キリストは真の主である、すべての主権者だということを明らかにします。9節を見ると、「その主となるために、死んで、また生きられたのです。」とあり、イエス・キリストの十字架と復活、それによってイエスが主となったように見受けられます。イエスが十字架で死にその死から三日後によみがえって来たことによってイエスが主になった、主権者になったと。しかし、そうではないことを私たちはもうすでに見て来ました。このローマ人への手紙の学びを始めた時、1章3-4節ですで見ました。「御子に関することです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、:4 聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。」と、このように記されています。「死者の中からの復活により、」、つまり、イエスの復活が明らかにしたことがここに記されているのです。イエスが死からよみがえって来ることによって明らかにされた事実があるのです。「大能によって公に神の御子として示された方」、すなわち、大きな力によって、死からの復活というその力をもってイエス・キリストご自身が神の御子であること、すなわち、神であることが明らかにされたパウロは言うのです。ですから、パウロが教えていることは、イエスは十字架と復活によって主、神になったのではなく、神であることがそれらによって明らかにされたということです。

思い出してください。イエスがこの地上におられたときに、嵐に対してそれを叱りつけると嵐は静まりました。自然界がイエス・キリストに全く服従したのです。悪霊たちに対してイエスが「出て行け」と言われたら、悪霊たちはそのイエスの命令に服従しました。そして、死に関しても、イエスが「よみがえる」と言われたら死でさえも従ったのです。これらの出来事がイエス・キリストは主権者だということ、主イエス・キリストは真の神だということを明らかにしたのです。すべてのものがこの方に従うと言うのです。パウロはこのローマ書 14 : 9で、イエスがいったいだれなのかを語っています。イエス・キリストの十字架と復活によってイエスが主になったのではないのです。イエスが主であることをあの十字架と復活が明らかにしたのです。イエス・キリストがすべての主権者であり、真の神であり救い主であることが十字架と復活によって明らかにされたのです。

だから、私たちがイエス・キリストの福音のメッセージを語る時に、私たちが人々に「罪を悔い改めて救い主を信じなさい」と言う時に、彼らに伝えなければならないメッセージは「イエスがいったいどれであるか」ということです。イエスは真の神であり、私たち人間に与えられた唯一の救い主であり、そして、この方が唯一の主権者です。我々が人々に罪の悔い改めを命じる時に言わなければいけないのは、「あなたはこの真の主権者なる方、あなたを造られた神に背いて生きてきたゆえに、その罪を悔い改めて、この救い主を信じ、この真の神であり唯一の主権者である方に従う選択をなさい。その決心をなさい。」ということです。なぜなら、それがみことばが私たちに教えていることだからです。

キリスト教会の中に出回っている一つのメッセージは、イエス・キリストを救い主と信じ、イエス・キリストを神と信じて、後にイエスを主と認めるということですが、そのような福音は聖書の教える福音ではありません。なぜなら、イエス・キリストはある時から主になったのではないのです。彼は永遠に主なのです。彼は永遠に神です。彼は永遠の救い主です。その方に対して間違っただけで来た私たちが、その方を正しく受け入れること、それは神の前に救いを求める者としての当然の姿であり、そして、このイエス・キリストのすべてを受け入れることなくして、どうして、私たちはこの方を心から信じたと言い切れるのでしょうか？みことばは私たちに教えてくれます。イエス・キリストは主なのです。そして、私たちがこの方の前にひざまづいて救いを求める時に私たちは決心するのです。主であられるこの方を私は自らの主として受け入れてこの方に従っていきますと。みことばは明確に私たちにその大切なことを教えてくれます。

パウロはこうして「我々は主に従う者となったのだ。だから、互いに受け入れ合っていきなさい。」と言います。キリストにある自由を楽しみ喜んでおられる皆さん、信仰の強い皆さん、神のみことばを理解してそのみことばによって歩んでおられる皆さん、一つだけ注意事項があります。当然、我々は先ほどから見て来ているように、自らの確信に基づいて歩んでいきます。神の前に感謝をもって歩んでいるかどうか、神の前に喜ばれることを選択しながら正しく歩んでいるかどうか、その動機も目的も吟味しなければいけません。その上で、私たち信仰者が注意しなければならないことが一つあります。コリント第一8章の中で、パウロはそのことを教えています。そこでパウロが私たちに言うことは、信仰の強い人が信仰の弱い人たちにどのように接して行くのか、ある一つの事例を挙げながらその説明をしています。それは「偶像にささげた肉」についてです。最初にも話したように、特に、異邦人の信者の中にそれに抵抗を覚えている者たちがいたのです。「偶像にささげた肉を食べてはいけません」と。しかし、みことばが教えること、パウロが言うことは「救われた私たちは神に感謝をもってすべてのものをいただくことができる」です。ですから、パウロは言います。「私たちはそのすべてをいただくことができます。」と。そのことを教えたパウロはIコリント8：9で「ただ、あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまずきとならないように、気をつけなさい。」と言っています。13節にも「ですから、もし食物が私の兄弟をつまずかせるなら、私は今後いっさい肉を食べません。それは、私の兄弟につまずきを与えないためです。」と書かれています。確かに、自由はあります。しかし、私たちの責任は弱いクリスチャンのつまずきになってはならないということです。「肉を食べてもいい」けれど、それがそのことにわだかまりを持っている人たちのつまずきになってしまうなら、パウロは「私は彼らの前では食べない」と言ったのです。

ここに大変な配慮を見ます。大きな愛がここに示されています。そのような配慮が必要なのです。私たちが気をつけなければいけないのです。だれかのつまずきになっていないかどうかです。なぜ、それが大切か、12節を見てください。「12 あなたがたはこのように兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を踏みじるとき、キリストに対して罪を犯しているのです。」、つまりパウロは、弱いクリスチャンたちのつまずきになっているなら、「あなたは私に対して、そして、キリストに対して罪を犯している」と言うのです。だから、つまずきになってはいけないと言うのです。確かに、自由が与えられました。でも、私たちはその中であって賢く選択をすることです。私たちは人々の前であって、特に、信仰歴が長かったり、信仰の先輩と言われていたり、聖書の知識を持っている人は気をつけなければいけないのです。もちろん、これはすべての人に言えることです。「人々につまずきを与えてはならない。それは主に對する罪だから。」とパウロは警告を与えるのです。

「あなたがたは群れとして一つになっていきなさい」とパウロは言います。主が受け入れてくださったのだから、互いに受け入れ合っていきなさい。仲間なのだから、主が救ってくださったのだから、兄弟姉妹なのだから受け入れていきなさいと。私たちはともに一人の主に従う者として新しい歩みを始めたのだから、互いに受け入れ合っていきなさいと言います。

4. 主だけがさばき主 10-12節

そして、14：10-12に「主だけがさばき主だ」ということにパウロはもう一度触れています。

1) さばく者 : それにふさわしいのはだれか？

10節「それなのに、なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。」と、このようなことをローマの教会の人たちが行っていたのを見て来ました。自分の兄弟をさばいている人たちがいたし、また、兄弟を侮っている者たちがいたのです。パウロはそれは間違っていると言うのです。そして、「私たちはみな、神のさばきの座に立つようになる」と言うのです。つまり、パウロが言いたいことは「さばきを行なうのはあなたの務めではない。それは神が為さることだ。」ということです。神だけが私たちをさばくのにふさわしいお方である、だから、「神のさばきの座」ということばが出て来るのです。

2) さばかれる者 : 神のさばきの座

そのときに何があるのか？ 11-12節に「次のように書かれているからです。「主は言われる。わたしは生きている。すべてのひざは、わたしの前にひざまずき、すべての舌は、神をほめたたえる。:12 こういうわけですから、私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きすることになります。」とあります。パウロはこのように言います。「あなたが神の前に立った時に、あなたが信仰者として為して来たこと、それが神の前でさばかれる。そのことをしっかり覚えて今日を生きていきなさい。」と。

信仰者の皆さん、パウロが教えたように、私たちは一人ひとり神の前に責任を負った者として歩んでいます。自分がどのように生きていくのかということはあなたの選択です。また、あなたの責任です。神に喜ばれることを選択して生きていこう、それはあなたの責任です。そのようにして歩んで行くときに必ずいろんな摩擦が生じて来ます。あなたが神に対してより忠実であろうとか、より神に喜ばれることを熱心にしていこうとすると、周りの人たちはあなたのことを不思議な目で見ます。そうすると心が騒ぐのです。少しぐらい妥協しても…と。パウロが言うことは「神があなたの歩みに対して審判を下すから、その正しい審判のことを覚えて今日を生きていきなさい。神が与えてくださる最終的な評価、それをしっかりと覚えて歩んで行くように。」です。

なぜなら、私たちはこの主権者なる神の前でそれぞれの歩みに関しての申し開きをすることになるのです。主の奴隷として生きたその信仰者としての人生の正しい評価が神の前で下ります。だから、私たちは信仰者として主に喜ばれる正しいことを考えて神の助けをいただきながら生きて行きます。いろいろなことがあって心が萎えそうになる時も、妥協したいと思うことがあっても、しっかりと覚えなければいけないことは「私は神のさばきの座に立つ。キリストのさばきの座に立つ時にこの方が私の歩みに対して正しい評価を下してください。だから、人が何と言おうと私は神の前を正しく歩んでいきたい。」ということです。そのように歩みなさいとパウロは教えるのです。

どのように生きていくのかという責任がある。だから、聖書を知らなければいけないのです。私たちの歩みは聖書に基づいたものであるはずですが、ですから、私たちは聖書を知らなければいけません。だから、もし皆さんがこのような歩み、こういう選択が正しいのかどうか分からないときは、みことばを知っている霊的なリーダーたちにそのことを尋ねることです。そして、尋ねられた皆さんは、あなたの言うことが本当に聖書通りかどうかしっかりと確認した上で語ることです。教える者たちは格別厳しいさばきを受けます。責任があるからです。間違った方向に導いてしまう可能性があるからです。しっかりとみことばに立って教えなさい、なぜなら、我々信仰者は神にお会いすることを待望しながら今日生きる者たちだからです。

ローマ15:7のみことばを最初に読みました。「こういうわけですから、キリストが神の栄光のために、私たちを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れなさい。」と。兄弟姉妹の皆さん、これが神が私たちに望んでいることです。私たちの教会に神が望んでおられることは、互いに受け入れ合っていくことです。私たちが一つになっていくことです。でも、それが難しいことは分かっています。残念ながら、私たちの間に個人的な好みがあります。「あの人が好きだ、この人はそうではない」と。そのような思いを私たちが赦してしまうなら、サタンが喜ぶような信仰者になってしまいます。そんなことにはなりたくないです。サタンに用いられるような、つまり、群れの中に分裂を作り出すような信仰者になりたくないです。一人ひとりが自分の心をしっかりと守らなければいけないのです。そのためには主が喜んでくださることは何かを考え、それを神の助けをいただきながら選択し続けていくことです。そうして歩んでいく時に神はあなたを用いてくださるのです。分裂を作る者ではなく一致を作る者として神はあなたを使ってくださいなのです。

そして、期待することは、みことばが教えているようにあなたが歩むことによって神のすばらしさが証されてゆくことです。あなたの喜びが神が喜んでおられることを私たちに証してくれるのです。そして、その喜びが多くの人々の励ましとなりいやしになります。そのような信仰者として、あなたは歩んでいくことができるのです。いつもここに戻って来ます。それは「あなたは今からどのように生きて行きますか？」ということです。いつもこの選択を私たちに問われます。今日からどのように生きていきますか？神が喜んでくださること、そのことをいつも考え、そのような選択をもって、主を喜ばせる人として歩

み続けてください。主を喜ばせること、それがあなたや私の喜びでありたいものです。それが神が私たちに期待しておられることです。

《考えましょう》

1. 主によって救われた者は救いを失うことがあるでしょうか？その理由を記してください。
2. キリスト者が主のために生きるのはどうしてですか？
3. 「神のさばきの座」、もしくは、「キリストのさばきの座」に立つのは未信者でしょうか？それともキリスト者でしょうか？そのさばきの座では何が行なわれるのでしょうか？
4. その「さばきの座」に立つ備えをするには、我々キリスト者は何を為すべきでしょうか？